

特別記事

世界のドラフトホース

(1) アメリカ、カナダ編

柏村 文郎



柏村 文郎（かしわむら ふみろう）

1950年生まれ。1997年に帯広畜産大学畜産学研究科修士課程を修了。1977年から4年間全国酪農業協同組合連合会に勤務。1981年に帯広畜産大学助手採用，2001年より同大学共生家畜システム学講座教授，現在に至る。学生時代4年間馬術部を経験し，現在は馬術部部長。研究教育は乳牛の管理と馬学。研究室では9頭の馬を学生と共に管理している。

1. ドラフトホースとは

ドラフトホース（draft horse: 米，draught horse: 英）とは、畑で鋤^{すき}を引いたり，荷馬車を引くときなどに使われる胴長で，頸や肢の太い大型の馬のことである。日本馬事協会の分類では挽^{ばん}系馬^{けいば}と呼ばれており，日本で登録できるのは，ブルトン，ペルシュロン，アルデンネ，ブーロンネ，クライズデール，シャイヤー，ベ

ルジアン，ブラバンソンの8品種である。しかし，世界にはもっと多くの品種があり，最近の本から拾い出ただけでもざっと表1のようになる。一般に馬が一つの品種として認められるには，登録協会がスタッドブック（馬の血統書）を整備していることが前提となる。しかし，アジアや中南米など，今も使役に使っている国々ではスタッドブックを整備していないことが

表1 世界のドラフトホース

品 種	原産国	起 源	品 種	原産国	起 源
Irish Draft	アイルランド	19th	Muraközi	ハンガリー	20th
Italian Heavy Draft	イタリア	18th ~ 19th	Percheron	フランス	18th
Shire	イングランド	19th	Norman Cob	フランス	19th ~ 20th
Suffolk Punch	イングランド	18th	Breton	フランス	Middle Ages
Noriker	オーストリア	16th	Ardennais	フランス	Pre-Christian
Haflinger	オーストリア	18th ~ 19th	Boulonnais	フランス	1st ~ 2nd AD
Friesian	オランダ	Pre-Christian	Comtois	フランス	16th
Dutch Draft	オランダ	19th	Auxois	フランス	19th
Franches—Montagnes	スイス	19th	Trait du Nord	フランス	19th
North Swedish Horse	スウェーデン	19th	Poitevin	フランス	19th
Swedish Ardennais	スウェーデン	19th	Brabant (Belgian Heavy Draft)	ベルギー	1st ~ 2nd AD
Clydesdale	スコットランド	19th	Sokolsky	ポーランド	19th
Jutland	デンマーク	12th	Soviet Heavy Draft	ロシア（ウクライナ，ウラジミール等）	19th
Schleswig Heavy Draft	ドイツ	19th	Russian Heavy Draft	ロシア（ウクライナ，ラトビア，リトアニア）	20th
Rhineland Heavy Draft	ドイツ	19th	Vladimir Heavy Draft	ロシア（ウラジミール）	19th
Døle Gudbrandsdal	ノルウェー	19th	Lithuanian Heavy Draft	ロシア（リトアニア）	19th

多く、世界にはこれよりはるかに多くのドラフトホースの種類がいることは間違いない。アラブやサラブレッドなど世界中に広まった品種とは違い、ドラフトホースは「その国」の「その地方」の馬であることが多い。その地方の気候風土や歴史や文化と深い関わりを持っている。そして、畑仕事や荷物の運搬など、人々の生活を支えてきたのがドラフトホースである。また、戦時には重い大砲や兵士の食料を運ぶための重挽馬^{じゅうばんば}としても使われた。

先進諸国では、第二次世界大戦後の1950年頃からトラクターが農村に普及し、ドラフトホースはその存在価値を失い、急速に減少した。日本でもその現象は同じで、昭和元年（1926）には1,486,453頭いた馬が、昭和54年（1979）には22,100頭にまで減少した。日本では、北海道に「ばんえい競馬」と呼ばれるドラフトホースの競馬があり、そのお陰で今年年間生産頭数は、1975年頃とほぼ同じ4～5,000頭を維持している。しかし、その多くはペルシュロン、ブルトン、ベルジアンなどが交雑された半血種であり、純粋種は希少になってしまった。日本馬事協会では、世界のドラフトホースについて資源調査を行なうことになり、私はその調査の一員として欧米のドラフトホースの飼養状況をつぶさに視察することができた。そこで、欧米のドラフトホースの現状と、さらには馬に対する欧米人の考え方について数回に分けて紹介する。

初回は、平成8年（1996）に調査したアメリカとカナダのドラフトホースについて紹介する。馬の歴史的な流れからするとヨーロッパの馬を知り、次いでアメリカやカナダの馬の文化を理解するのが良いと思うが、私の頭の整理がつきやすいように調査した順に紹介する。

2. アメリカ・カナダのドラフトホース

ヨーロッパから新大陸に渡ったアメリカ人は新しい馬の品種を生み出すことにかけては、驚異的な才能を

発揮した。クォーターホース、スタンダードブレッド、ペイントホースなど数多くの品種を作りだした。しかし、ことドラフトホースに関してはヨーロッパから持ち込んだ品種の血統を大切に守りながら育種改良を行なったようである。アメリカにはベルジアン、ペルシュロン、クライズデール、シャイヤー、サフォークの登録協会がある。また、カナダにはベルジアン、ペルシュロン、クライズデールの登録協会がある。それぞれの協会の登録頭数を表2に示した。次にそれぞれの品種について簡単に紹介する。

a) ペルシュロン (Percheron)：ペルシュロンの原産地はフランス北部のノルマンディー地方のペルシュ (Le Perche) 地区である。アメリカにこの品種が最初に持ち込まれたのは1839年であった。アメリカペルシュロン協会は1881年に設立された。ペルシュロンはアメリカでは最も人気の高いドラフトホースとなり、1930年代にはアメリカのドラフトホースの純粋種の70%にも及んだという。ペルシュロンに限らずアメリカに持ち込まれたドラフトホースは、1930年代までは運搬用または農耕用の主要な原動力であった。ところがその役割がトラックとトラクターに取って代われ、その数は急速に減少した。1900年代の初頭に年間10,000頭も登録されていたペルシュロンが、半世紀後の1954年には58頭が登録されるのみとなった。しかし、その後再びド

表2 ドラフトホースの価格 (単位：千円)

品 種	アメリカ合衆国	カナダ
ベルジアン	3,896 (* 1)	1,149 (* 4)
ペルシュロン	2,002 (* 2)	1,137 (* 4)
クライズデール	500 (* 3)	489 (* 4)
シャイヤー	250 (* 3)	—
サフォーク	100 (* 3)	—

* 1: Percheron News, Spring 1996

* 2: Belgian Draft Horse Corporation of America, February 1996

* 3: これらは予想概数。

* 4: Canadian Livestock Records Corporation, 1995 Annual Report

ラフトホースは趣味・娯楽用動物として復活し、1988年のベルシュロン登録頭数は1,088頭になり、さらに1998年には2,257頭にまで増加した。現在も増加傾向は続いている。なお、フランスのベルシュロンはほとんどが芦毛であるが、アメリカには青毛がかなりいる。

- b) ベルジアン (Belgian) : アメリカのベルジアンが原産地ベルギーからアメリカに初めて持ち込まれたのは1866年であった。現在のベルギーには北部にベルジアンドラフトホース (Belgian Draft Horse または Brabant) がおり、南部にアルデンネ (Ardenais) と呼ばれるドラフトホースがいる。アメリカに持ち込まれたベルジアンはベルギー北部のフランドル地方またはブリュッセル周辺のブラバン地方から輸入された馬の子孫である。アメリカのベルジアン協会が設立されたのは1887年である。アメリカで独自の改良を重ねた結果、ベルギーのドラフトホースとの共通性は少なくなってしまった。また、ベルギーのベルジアンドラフトホースは粕毛が多いのに対し、アメリカのベルジアンはほとんどが栗毛である。ベルギーのベルジアンドラフトホースは年間生産頭数は900頭程度であるのに対し、アメリカのベルジアンは4,000頭近く生産されているため、日本で一般的にベルジアンというとアメリカやカナダのベルジアンを指すようになった。アメリカに輸入されたベルジアンは1937年以降ベルシュロンを抜いてアメリカでは最も登録頭数の多いドラフトホースとなった。現在では多くのアーミッシュ (後述) がこの品種を農作業に利用している。

- c) クライズデール (Clydesdale) : クライズデールはスコットランドのクライド河渓谷が原産であり、1850年頃アメリカに輸入された。スコットランドからの移民が多いウィスコンシン州とミシガン州が伝統的な生産地である。ビール会社のバドワイザーの広告

宣伝に利用され大変ポピュラーな品種となった。肢端の豊かな距毛が特徴的である。

- d) シャイヤー (Shire) : イギリス中東部の低地帯が起源であるシャイヤーは、1853年に初めてアメリカに輸入された。1910年代には6,700頭/年の登録が行われ、一時最もポピュラーな品種となったが、1950年代には25頭が登録されるのみの希少品種となった。しかし、今日盛り返し1995年には250頭の登録を行った。重種の中では最も大型な品種の一つで、クライズデール同様、肢端の豊かな距毛が特徴的である。
- e) サフォーク (Suffolk) : イギリスのサフォーク地方において、従順な農耕馬 (体高160~163 cm) として改良・育成された。1880年にアメリカに輸入され、一時人気を呼んだが農業の機械化により激減した。1985年にはアメリカの希少品種 (rare breed) に指定されたが、1995年には100頭の登録がなされるまでに回復した。従順な気性とパワーあふれる牽引力のため農耕作業や荷物の運搬に適している。

3. ドラフトホースの飼養地域

私たちが調査したのは、日本の「ばんえい競走馬」として利用されているベルシュロンとベルジアンであった。そこで当地で得られた資料を元にアメリカとカナダにおけるこの2大品種について、登録頭数の多い州を図1に示す。この図からドラフトホースの主産地は五大湖周辺であることがわかる。これらの州は古くから開拓された地域であり、アメリカに移住したヨーロッパ人は、それぞれ自分の出身地近くのドラフトホースを持ち込んだようである。

4. ドラフトホースの飼養目的

北米のドラフトホースの現代的飼養目的はいったい何なのか。今回の調査でこの質問を何人かの人にしたが、答えは決まって、「ホビー (趣味)」または「プレ

ジャー（楽しみ）」と言う答えが返ってきた。最初にそれを聞いたとき、私は、ドラフトホースを飼って楽しむということがどういうことなのか、なかなか理解できなかった。しかし、調査が進むにつれて、次第にその背景と内容が分かるようになってきた。ここでは、ドラフトホースの飼養目的を次の7つに区分した。それは、(a) 趣味、娯楽、(b) ビジネス、(c) 使役用、(d) ビール会社の宣伝用、(e) 肉用として輸出、(f) PMU生産、(g) 材木の切り出しである。ここで、a), b), c) の目的が大半であり、それ以外はマイナーである。

(a) 趣味でドラフトホースを飼うとは

カナダでベルジアンを飼っている初老の紳士は、馬

を飼う理由について、「人生は夢が無くてはならない。私の夢は私の飼っている馬からベルジアン・グランドチャンピオンを出すことだ」と笑いながら答えてくれた。またある人は「私にとって馬を飼うのはあなたがゴルフをするのと同じだ」とも言っていた。日本では趣味でゴルフをする人は多いが、趣味でドラフトホースを持つ人はほとんどいないだろう。

アメリカでもドラフトホースほどの大きな動物は都会では飼えない。今回の調査で感じたのは、アメリカやカナダは巨大な田舎だということである。調査した牧場はブリーダーが多かったが、主に家族経営の農家や農村に住んでいるサラリーマンや企業経営者の趣味といったところであった。農家の厩舎は昔からの古い

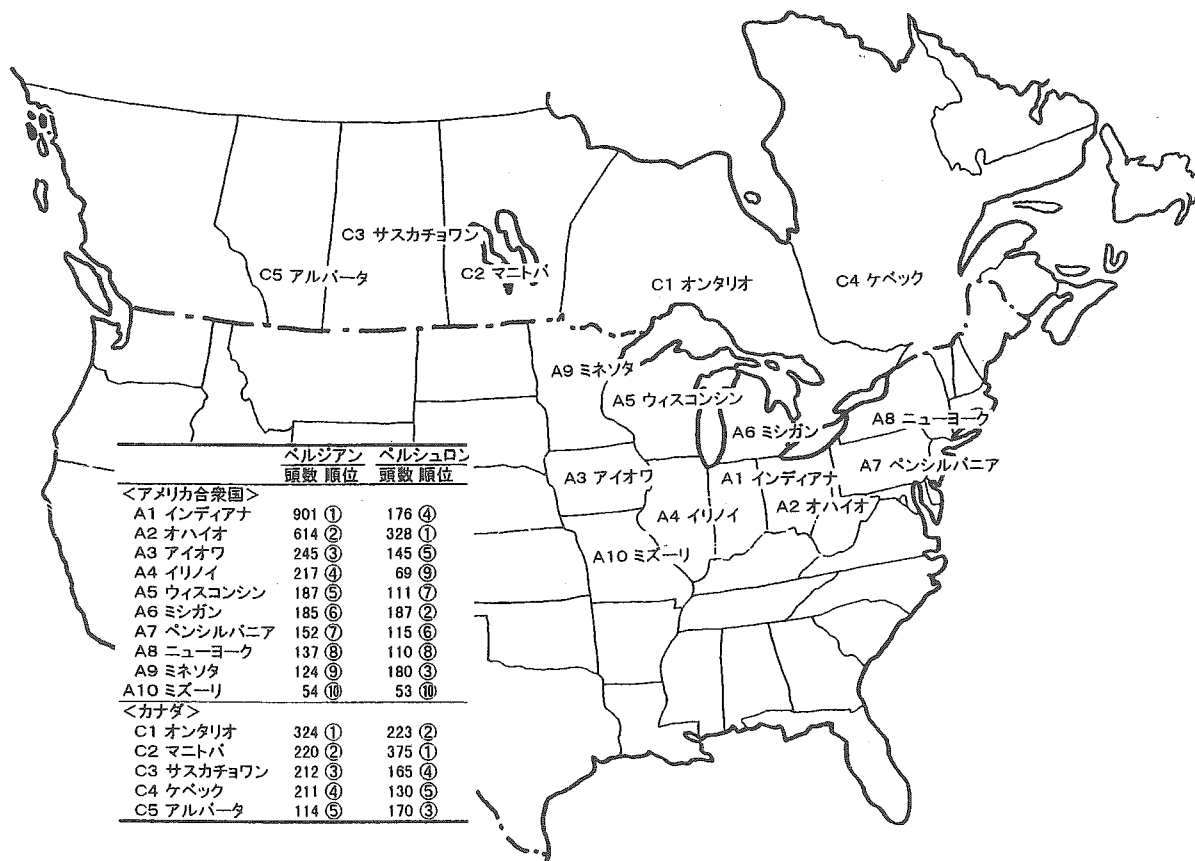


図1 ベルジアンとベルシュロンの州別の登録頭数（1995年）

納屋を修理しながら使っている人が多かった。馬を飼うための土地（放牧地や採草地）は、ふつう1頭1ha（100m四方）程度と考えているようである。農家で飼われている繁殖雌馬のなかには、あまり手入れされていないものも見られたが、農家以外の方が飼っている馬はよく手入れされており性格もおとなしかった。馬をよくショーに出すらしい。また、厩舎や馬房も人に見てもらいたいといわんばかりにきれいに飾られている所もあった（写真1, 2）。

カナダ・アルバータ州では、ペルシュロンが広い放牧地に周年放牧で飼われていた。私たちが訪れたときは、10月初めだというのに記録的に早い初雪が降った。厩舎らしいものもない放牧地では、多くの馬が雪の下に隠れた草を一生懸命食べていた（写真3）。

（b）北米におけるドラフトホースのショーとは

ドラフトホースを飼っている人の多くは趣味で馬を飼っているが、その裏にあるショーというものを知らなくてはその内容を理解できない。そこで、次に北米におけるドラフトホースのショーについて説明する。

ペルシュロンの最大のショーは、3年に1回行われる世界ペルシュロン大会（World Percheron Congress）である。初回は1978年に開催された。我々が調査した

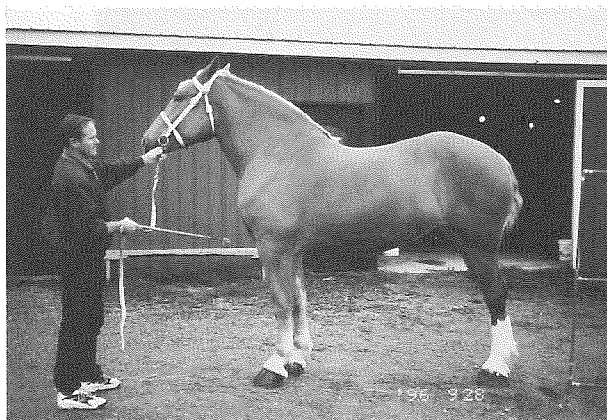


写真1 ショータイプのドラフトホース（ベルジアン、雌、3歳、体高178cm）と消防士のご主人。奥さんと共にドラフトホースを飼うのが趣味。

1995年には第7回大会がアメリカのミズーリー州カンザス市で行われた（写真4）。ペルシュロンニュース（Percheron News）という雑誌には次のような内容の記事が載っていた。出陳者は140名、出場馬は450頭であった。会場ではショーの他に、馬に関わる歴史的貴重品、写真、絵画、血統登録書および古いペルシュロンマガジンなどが展示された。ショーの内容としては、

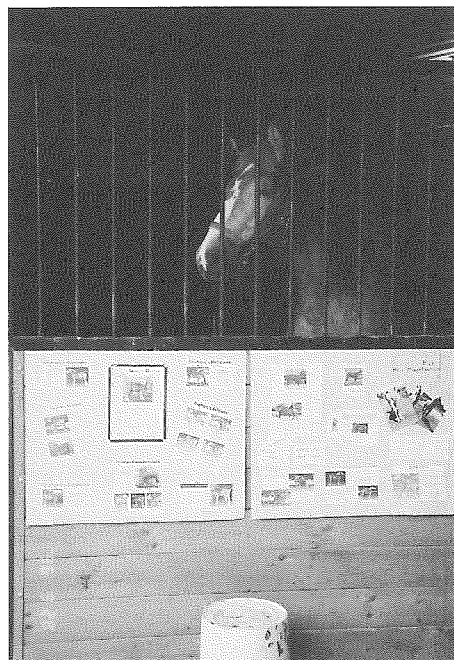


写真2 馬房の前に飾られた写真

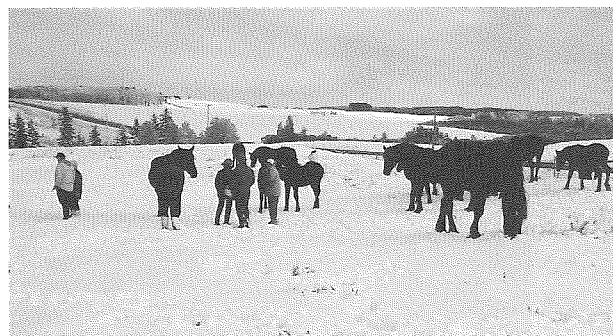


写真3 周年放牧で飼養されているドラフトホース（カナダ・アルバータ州）

ホルター (halter=頭絡) と呼ばれる一頭ずつショールリングに引き出して体型や歩様を審査する部門、ヒッチ (hitch) と呼ばれる馬車を引く部門、ライディング (riding) と呼ばれる乗馬の部門、鋤^{すき}で畑を耕すプラウ (plow) と呼ばれる部門があった (写真5)。さらにそれぞれの部門は、馬の性別や年齢により別れている。馬車を引く部門では、1頭引きから8頭引きまでである。さらに、婦人が馬車を御すクラスや若い人のためのジュニアクラスもある。各クラスの入賞者にはかなりの賞金も出され、6頭立て馬車のクラスが1番のメインイベントのようであった。

ベルジアン最大のショーは、4年に1回行われる北アメリカベルジアンチャンピオンシップ (North

American Belgian Championship: NABC) である。第1回は1988年カナダ・オンタリオ州トロント市で、第2回は1992年アメリカ・ケンタッキー州レキシントン市で、第3回は1996年7月にカナダ・マニトバ州バンドン市で、第4回は2000年アメリカのオハイオ州コロンバス市で開催された。

このように数年に一回という特別のショーの他に、カナダのオンタリオ州トロント市で毎年開かれるロイヤル農業ウィンターフェア (Royal Agricultural Winter Fair) は有名で、あらゆる家畜のショーが行われる。その中にはドラフトホースのショーもあり、カナダのみならずアメリカからも多くの馬が参加する。さらに、州ごとに毎年開かれているステートフェアの中にもド

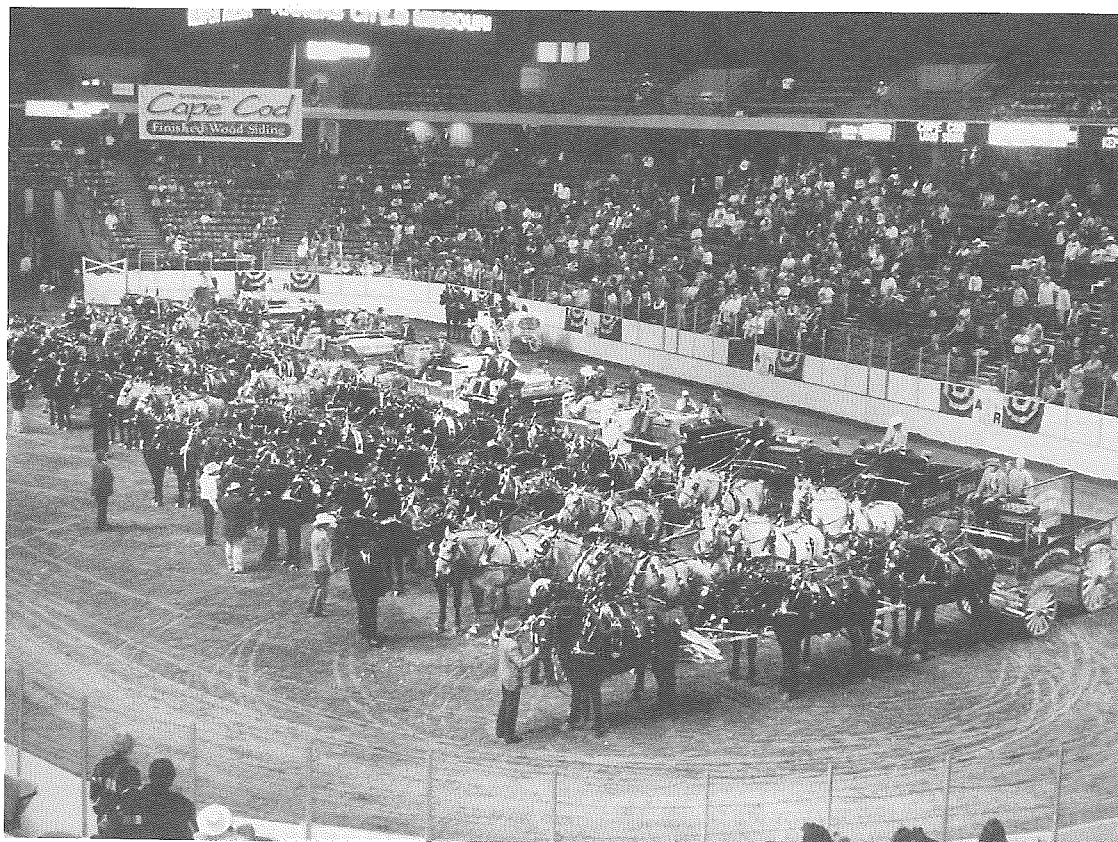


写真4 1995年の世界ベルシュロン大会 (Percheron News より)



写真5 耕作競技 (plowing contest)

ラフトホースのショーが含まれている。数万人が訪れる見物客の中でショーが開かれ、そこで自分の馬を見てもらうのが所有者の大きな楽しみになっているようだ。その他にも州ごとの協会や有志によるショーやオークションも加えると、北米全体では春から秋にかけて毎週どこかでドラフトホースにまつわる行事が開かれていると言っても過言ではない。

インターネットでドラフトホースの行事カレンダーを見ると、体型審査 (halter) や馬車審査 (hitch) の他に**ばんえい**競技 (horse pull) がかなり開催されていることがわかる (写真6)。その他、材木引き競技 (log skidding) や耕作競技 (plowing) などみられる。

(c) ビジネスとしてのドラフトホース生産

ビジネスとはいってもドラフトホース生産だけで生計を立てている人はほとんどいない。北米での軽種馬生産はブルジョワの遊びといわれるように、ドラフトホース生産もそれに近い。ここでは馬のために雇用者を雇っている牧場をビジネスとして分類した。ドラフトホースのショーでは馬車が醍醐味であるから、このような牧場では調教師も雇っている。規模的には50～60頭程度であり、贅沢な厩舎を持っているのが特徴である。またこのような牧場の馬は大変よく手入れされており、調教もよく行き届いている (写真7)。これら



写真6 ばんえい競技 (pulling contest)

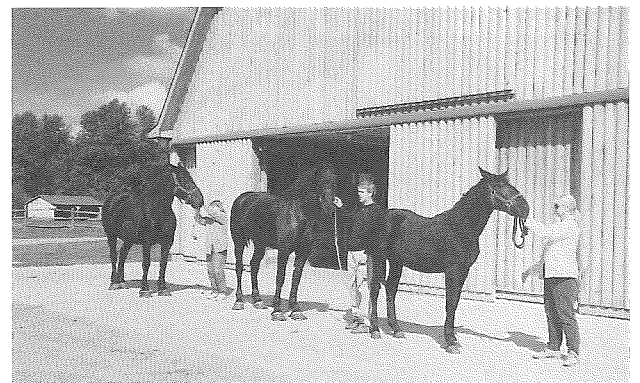


写真7 ビジネスとしてのペルシュロン生産 (ミシガン州)

はお客さんに馬を見せるための心使いだと思われる。このような牧場は、400～700 haという広大な敷地で、観光事業を手がけているところもある。

(d) 馬とアーミッシュ

アメリカには約9万人のアーミッシュがいるといわれている。彼らは、キリスト教プロテスタントの一派で、宗教的迫害を逃れてヨーロッパからアメリカ大陸にやってきた。宗教上の理由から武器はもちろん、近代文明の産物である電気や自動車も使うことを否定している。今回訪問したオハイオ州やインディアナ州に特に多く、カウンティ (アメリカの行政単位) の人口

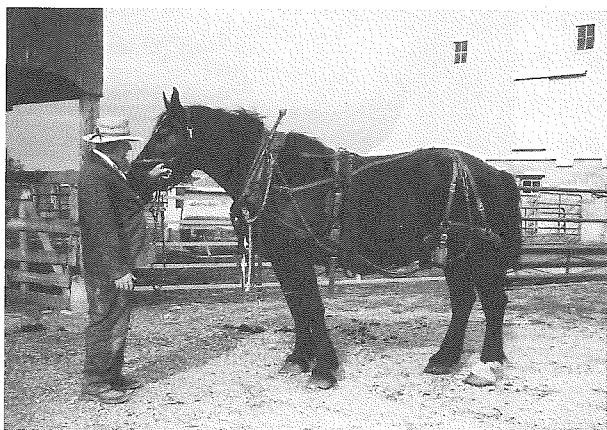


写真8 ハーネス（馬具）をつけたファームタイプのベルシュロン（雌，18歳，体高173 cm）



写真10 町を走るバギー（buggy）（オハイオ州）

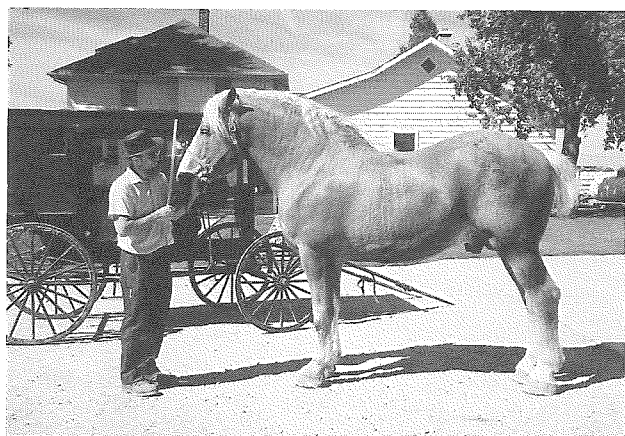


写真9 アーミッシュの所有するショータイプのベルジャン（雄，6歳，体高185 cm）



写真11 店の横にある馬車の繫留場

の半数以上がアーミッシュという地域もある。カナダにもオンタリオ州には少し住んでいると聞いたがその数は少ないようである。アーミッシュのほとんどは農民であり、農作業や交通手段に馬を利用している。アメリカベルシュロン協会では登録馬の約20%が、アメリカベルジャン協会では30～40%がアーミッシュの所有ではないかと言っていた。我々の訪れたアーミッシュの農家はブリーダーに相当すると思われるが、20～30頭のドラフトホースを所有していた。一農家の耕

地面積は、馬で畑を耕作するためアメリカとしては余り広くなく、80～160エーカー（32～64 ha）であった。彼らが農耕用に使っている馬は、ショーに出す馬とは違い、肢が短く、胴の長い馬が多かった（写真8）。またどの農家にも交雑種はおらず、農耕用としても純粋種を使用していた。一方、これは彼らのサイドビジネスに当たるのであろうが、ショーに出せるような体型の馬も生産していた（写真9）。彼らの乗り物は、バギー（buggy）と呼ばれる1頭または2頭立ての黒塗りの

馬車である（写真10）。バギーを引くのはスタンダードブレッドで、そのほとんどがハーネスレース（^{けい}競走）で廃用になった馬とのことであった。彼らは、買い物に出かけるときも馬車を使うので、マーケットの横には馬車用の^{けいりゅう}繋留場がみられた（写真11）。彼らがいる限り北米におけるドラフトホースの資源枯渇は心配がないと確信した。

（e）ビールの宣伝

欧米人は、ドラフトホースがビール樽を運ぶ馬車を引く姿にノスタルジアを感じるようだ。そのためビール会社の宣伝にはドラフトホースが使われている。例えば、バドワイザーはクライズデールを使い、カールスバーグはベルジアンを使い、モルソンはペルシュロンを使うといったふうである。ビール会社は馬の所有者と契約を結び、ビール樽を積んだ馬車で全国を練り歩くとした宣伝キャンペーンもしているようだ。

（f）肉用としての輸出

偶然であるが、イリノイ州のアーミッシュの農家で肉用として日本向けに出荷するという馬を見かけた。アーミッシュは、馬を食べることに対して嫌悪感を抱いているのではないかと心配していたが、全くそういうことはなかった。彼らの一人に、廃用になった馬はどうするかと聞いたところ、あっさりドッグフードだと言ったのは意外であった。ちなみに、1995年のアメリカ農務省の資料によると、馬肉（枝肉）の輸出先は、EU、ベルギー、フランス、日本、スイスの順であった。

（g）PMU生産

PMU（Pregnant Mare Urine）とは、妊娠した雌馬の尿から性ホルモンのエストロジェンを抽出するものである。エストロジェンは更年期障害の治療薬としてまたは美容に効果があるということで化粧品にも使用されている。カナダ西部のアルバータ州には大規模なPMU生産牧場がある。今回の調査では訪問することができなかったが、そこに行けば一度に何百頭というド

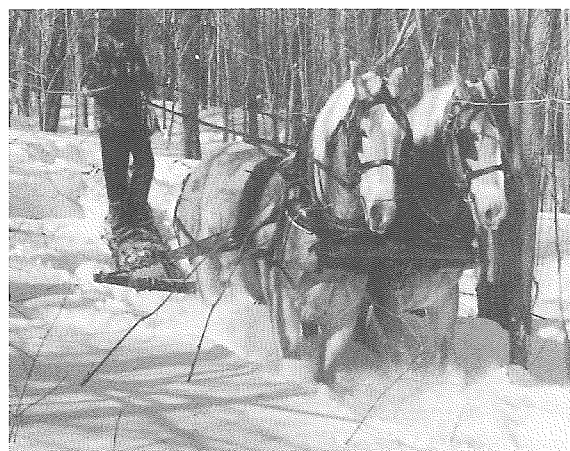


写真12 材木の切り出し（logging）



写真13 ショーのために整形された蹄

ラフトホースを見ることができるとの話であった。また、そのような牧場には日本から肉用馬の購入人が訪れることもあるそうである。しかし、このような牧場では多頭数の馬をより経済的に飼おうとするため、馬の飼養状況が必ずしも良好とは言えないらしく、アニマルライト（動物の権利）やアニマルウェルフェア（動物福祉）の団体からクレームをつけられているそうである。

（h）材木の切り出し

カナダ西部のブリティッシュコロンビア州で多く見られると聞いた。車が入り込めないような場所の木材を切り出すのに使われているとのことであった。環境に優しい方法だと住民に歓迎されているようである。このような仕事をロギング (logging) と呼んでいた (写真12)。

5. 今流行のドラフトホースとは

アメリカ、カナダのドラフトホースをその体型から次の3タイプに分けると理解しやすい。ショータイプ (ニュータイプ)、ファームタイプ (オールドタイプ)、ミートタイプである。これらのうちで趣味として人気のあるのがショータイプであり、これが北米ドラフトホースの主流である。これをアーミッシュの人はニュータイプと呼ぶ。使役用に求められているファームタイプ (オールドタイプ) とは体型が違うという。ショータイプは馬車を引いたときに見栄えがするように体高が高くスマートで、速歩のとき前肢を高く挙げる馬が好まれる。ショーでは、雄は体高が18ハンド (183 cm) 以上ないと入賞できなくなったという。一方、ファームタイプは、胸幅が広く、胸が深く、胴長

で、halter (馬具) が付けやすいように体高はあまり高いのは良くないとされている (17ハンド以下)。ミートタイプは特に食肉用として生産されているわけではなく、骨太で、骨格ががっちりしている馬が肉量も多いということのようだ。

「蹄なしは馬にあらず (no hoof no horse)」という言葉は何度も聞いた。ショーに出す馬の蹄を大きく見せるために、四角に削蹄したり、蹄と蹄鉄との間にゴムパッキンのようなものを挟んで装蹄したり、黒く色を塗ったりしていた (写真13)。その他、管が細くフラット (扁平) で、肩やつなぎの角度がよく (45度)、き甲がフラットなものが良いとされているようである。

6. 繁殖

サラブレッド以外の馬は、スタンダードブレッドやクォータホースなどの競馬で使われる馬も含め、かなり人工授精 (AI) が普及しているようであった。ドラフトホースは自然交配が主流であるが、国が広いこともあり遠方に気に入った種雄馬がいるときなどはAIも珍しいことではない。ただし、精液を凍結すると受

表3 アメリカ・カナダのドラフトホースの登録頭数 (1995年)

		アメリカ合衆国			カナダ		
		最低	最高	平均	最低	最高	平均
ベルジアン							
	雄子馬 Colt	45	339	113	84	840	210
	雌子馬 Filly	68	396	170	126	1,260	252
	牝馬 Mare	283	1,130	452	210	3,360	420
	雄馬 Stallion	226	1,356	565	252	3,360	420
	去勢馬 Gelding	170	1,130	339	—	—	—
ベルシュロン							
	雄子馬 Colt	57	565	113	42	420	—
	雌子馬 Filly	90	1,130	226	126	672	—
	牝馬 Mare	170	1,695	452	126	1,260	—
	雄馬 Stallion	170	1,695	452	168	2,100	—

注: 1米ドル = 113円, 1カナダドル = 84円として換算した。

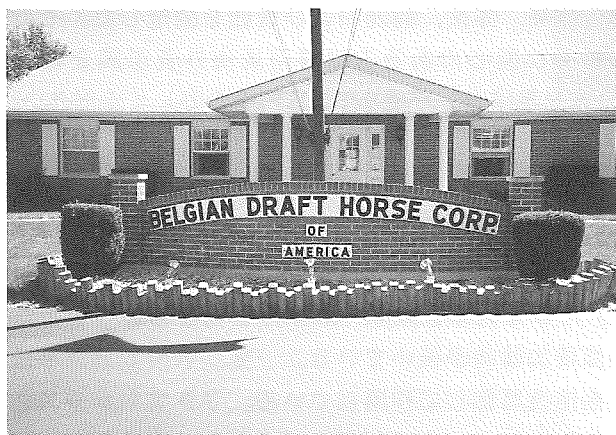


写真14 アメリカベルジャン協会（インディアナ州，Wabash）

胎率が極端に落ちるため、ほとんどが冷蔵で生のまま保存され、精液採取からAIまで1日以内に輸送できる範囲で実施されるとのことであった。なお、カナダ・アルバータ州では、周年放牧の雌馬の群れに雄馬を放す牧馬（まきうま）方式の繁殖が行われていた。

7. ドラフトホースの値段

ドラフトホースの売買は、オークションと農場での庭先取引が半々で行われているようである。ドラフトホースの価格は、ショータイプとファームタイプではかなりの開きがある。ショーで入賞するような馬はかなりの高額で取り引きされる。また、ショーで馬車を引けるように調教された馬（去勢馬が多い）にはさらに付加価値がつく。アメリカとカナダで個人的に聞いたドラフトホースの価格を表3に示す。平均的価格は、当歳の子馬が1頭20万円、成馬なら40～50万円程度のようなのである。なお、肉用馬の価格は、アメリカでは生体1ポンド当たり1US\$, カナダでは0.9カナダ\$と聞いた。この見当でいくと肉用のドラフトホースは、1頭が20万円程度と思われる。

8. 登録協会の仕事

北米ではドラフトホースの品種ごとに全国規模の登録協会がある。今回は、アメリカベルシュロン協会（会員2,700名、オハイオ州）、アメリカベルジャン協会（会員6,000名、インディアナ州）、カナダベルシュロン協会（会員700名、アルバータ州）、カナダベルジャン協会（会員1,400名、オンタリオ州）を訪問した。協会の主な仕事は、登録業務（registration）やスタッドブックの管理、売買による馬主変更手続き（transfer）、会報の発行、会員相互の情報交換や若い人たちへのドラフトホースに関する教育啓蒙活動などである。カナダには、カナダ家畜登録協会（Canada Livestock Record Corporation: CLRC）という組織があり、牛、馬、豚など50種類の家畜についての全国の登録業務を一括してコンピュータで管理していた。カナダの各協会の会員は、登録や馬主変更の書類をCLRCに直接送付すると、CLRCから会員に登録証明書が送られ、協会に登録されたという書類が送られてくる仕組みになっていた。一方、アメリカの登録協会は、それぞれの品種が最も多く飼育されている地方の田舎町にあり、小さな戸建ての建物であった（写真14）。アメリカベルジャン協会では、パソコン上で動く登録用ソフトウェアを持っており、かなり機械的に登録業務が処理されていた。一方、カナダの協会では登録業務をする必要がないためか、専用の協会事務所はなく、秘書（secretary and treasurer）の自宅が事務所代わりに使われていた（写真15）。カナダベルジャン協会の会報には、日本のばんえい競馬用としてベルジャンを輸出したことや最近日本でベルジャンが活躍している様子が載せられており、ばんえい競馬に対する関心が伺われた。

彼らの登録方法は所有者が馬の特徴を自ら記載し協会へ送付することにより行っている。日本ではベルジャンの毛色は栗毛とされているが、登録申請紙には、鹿毛、ブロンド、栗毛、レッドソレル、ローン、ソレルなどの中から選ぶようになっていた。最近、多くの



写真15 カナダベルジアン協会の秘書バーバラさん（中央）と調査員。自宅を事務所にしていた（カナダ、オンタリオ州）

協会ではDNA検査が義務づけられるようになってきたようである。DNAの鑑定は、アメリカではカリフォルニア大学、カナダではオンタリオ州のゲルフ大学で行い、双方で鑑定法を統一してあるので互いにその結果は信用できるとのことであった。

全国規模の協会の外に各州には同好者の集まりである州単位の小さな協会があった。それらは、登録業務を行うのではなく、情報交換や年に数回の親睦を深めるための会合を持ったり、フェアと呼ばれるイベントを企画したりする。

10. 調査農家と馬の体格測定値について

今回の調査では、アメリカで19戸、カナダで15戸、計34戸の牧場を視察し、そのうち22戸の農家で聞き取りをした。さらに見せてくれた馬のうち何頭かを選

び、体高、体長、胸囲および管囲を測定した。その調査結果に関心のある方は農用馬海外資源調査報告書（日本馬事協会、平成9年3月）を参照してください。

11. まとめ

北米でも1950年頃からトラクターが農村に普及し、ドラフトホースはその存在価値を失い、急激に減少した。しかし近年、趣味・娯楽用動物として復活し、現在は増加傾向が続いている。一方、アーミッシュは現在も使役馬として利用している。ドラフトホースを体型から、ショータイプ、ファームタイプ、ミートタイプに区分すると分かりやすい。それぞれの特徴を一口で述べると、ショータイプは肢が長くスマートで、ファームタイプは胸幅が広く胴長で、ミートタイプは骨太なずんぐり型となる。北米での主流はショータイプであり、日本のばんえい競馬で求められているファームタイプは少ない。馬の品種改良はその方向性が明確であれば比較的短期間（10年）で体型が変わると感じた。

参考文献

- Edward E.H. (楠瀬 良監訳). 1995. アルティメイト・ブック馬. 緑書房, 東京.
- Edward E.H. 1994. The encyclopedia of the horse. Dorling Kindersley, London.
- アフアナシェフ S.V.・リヤーホフ B.N. (日本中央競馬会監修). 1974. ソヴィエト馬種図鑑. 日本中央競馬会, 東京.
- 柏村文郎・横川浩二・平原榮人. 1997. 農用馬海外資源調査報告書. 日本馬事協会, 東京.